第３回研究大会

# パネル展示「都下小学校３年生の家庭での飼育状況」

獣医師　中川美穂子

（目的）

子どもは幼児期から普通の環境におけば，

| | 西東京市立 | | | | | | | | | | 小平市立 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学校名 | 保谷二 | 中原 | 住吉 | けやき | 上向台 | 向台 | 保谷 | 本町 | 柳沢 | 東伏見 | 小平１０ | 小平１５ | 合計 |
| 児童数 | 73 | 59 | 49 | 111 | 75 | 116 | 58 | 48 | 64 | 101 | 70 | 70 | 894 |

脳が正常に発達し普通の人に育つと言われている．脳科学者によれば，普通の環境というのは，親の愛情のもと，自然や動物，友達などと普通に遊び，交流できる環境と言う．命への鈍感さは動物との交流の少なさをあらわしているが，今回，その子どもの育つための環境の一つとして，家庭での動物飼育の状況を調査した．

（調査時期と対象）

2005 年２月から３月にかけて　以下の西東京市と小平市の公立小の新四年生 894 名

（方法）

それぞれの学級で，こどもたちに説明をして，子どもの疑問に対応しながら調査紙に記入してもらった．

調査は，「飼育していない」子と「飼育経験のある子」に分けながら行われ，飼育経験のある子については，「以前飼育していた動物」と，「現在の飼育動物」をそれぞれ記入してもらった．

なお，動物種を人への働きかけが多い順に「犬･猫」「小型ほ乳類」「小鳥」「カメ」「魚類」に分けて，「犬猫」を高位として，複数種を飼っている場合はより高位の動物の方に分類した．

（結果）

「飼育していない子」以前は５０％以下であったが，現在は５３％になっている．飼育していない子には昆虫類やマリモなども「飼育している」と言った子も分類している．

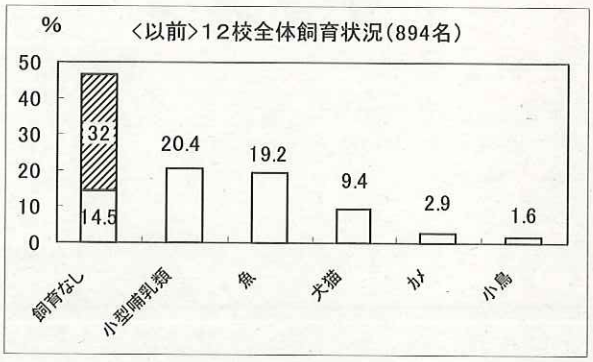
イヌや猫は子の年齢があがるにつれて９から１６％に増加している．小型ほ乳類は以前は，２０％であったが，現在は５％に減少している．今回はチャボの飼育はなかったが，小鳥も殆ど飼われていない．現在，魚を飼育する子が最多であり５人に一人が飼っている．

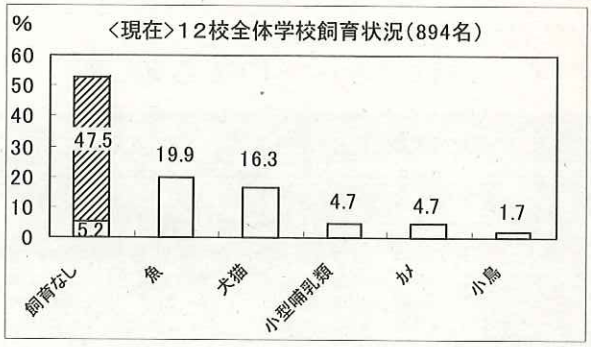
（考察）

魚類は水槽の中にいるため衛生的だと思われ，また世話も毎日ではないため歓迎されていると想像される．同じ理由からか，学校の教室内飼育でも魚は最多の種類である．

しかし，子どもを育てるには，抱くことができ，情を通わせることができる動物が大きなはたらきをすることが認められている．＊1

現在の子どもたちは　飼育経験を持たない子が半数以上であり，飼育しても触れない水生動物の場合が多い．これには地域差は殆どないと思われる＊2．親が子どもの成長を考えて，有効な環境を与えようとしない現在は，学校での「ほ乳類やチャボ」の飼育が以前と比べようもないほど重要な意味を持ってきている．




（注）

＊１中川美穂子　00 年（教室内飼育）児童への動物の影響　P26「学校飼育動物のすべて」ファームプレス

＊２中川美穂子　03 年　家庭での動物飼育　「学校飼育動物と生命尊重の指導」教育開発研究所

参考 HP　「学校飼育動物を考えるページ」http://www.vets.ne.jp/~school/pets/